

社会問題研究における社会構築主義と批判的实在論

中村 正ⁱ

構築主義あるいは構成主義は科学全般に影響を与えている。なかでも社会問題の社会学的研究（臨床社会学、社会病理学を含む。以下、社会問題研究と総称する）は「社会的なるもの」を扱っているので構築主義と親和性がある。また、言語による主観的現実の再構成をめざすナラティブアプローチ（ナラティブセラピーを含む。ナラティブと表記することもある）は物語、言語、現実の連環による主観的現実を重視した「対話的協働としての心理-社会臨床」を基本とするので構築主義的である。本稿では、この社会問題研究とナラティブアプローチの領域における構築主義を扱うこととしたい。手順として、社会構築主義の批判のいくつかを吟味し、その到達点を確認し、臨界点まで辿り着きつつ、社会問題を研究することの意義として継承すべき諸点を確認する。さらにその向こう側へと歩みだすために批判的实在論との関係を探り、今後の社会科学方法論を模索する。その事例として、社会構築主義、ナラティブアプローチ、社会問題研究の交差する領域にある「語りえないこと」の存在に注目した暴力臨床のサイレンシングを取り上げる。今回は「批判的現在」の創発に社会問題研究が貢献するという点に社会構築主義の役割があることを確認し、社会科学方法論の展開の手がかりとしたい。

キーワード：構築主義、社会問題の社会学、ナラティブ、暴力臨床、サイレンシング

目次

- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会構築主義の臨界点まで <ol style="list-style-type: none"> (1) ここでの課題 (2) 社会問題の社会学的研究 (3) 多元的社会的社会問題研究 (4) 存在論における恣意的な境界設定-オントロジカル・ゲリマンダリングの指摘 (5) 社会構築主義の臨界点に留まることの意義-逡巡と批判から (6) 社会構築主義の可能性の継承とドミナントな物語の書き換え 2. 沈黙する言葉（サイレンシング）と反乱する身体（アクトアウト） <ol style="list-style-type: none"> (1) 沈黙と語りえぬことへの関心 (2) 物語の事後性と語られたことの外部 | <ol style="list-style-type: none"> (3) DVにおけるサイレンシングについての研究 <ol style="list-style-type: none"> ① 暴力とサイレンシング ② 男性が沈黙をおしつける過程の詳細とサイレンシングの特徴 ③ 関係性の病理 ④ 被害のナラティブと沈黙-抑うつとサイレンシングの関係について (4) 社会が用意し、期待する「悪のドラマ化、選択の賛美、不幸の逆恨み」という物語化を超えて「複数の声を聴く」 3. 批判的現在を導出することと創発性の分析的歴史 <ol style="list-style-type: none"> (1) 批判的現在をみること (2) ナラティブセラピーは社会臨床論であること (3) ナラティブセラピーの社会的背景と出立の特徴 (4) 創発性の分析的歴史の記述 |
|---|--|

i 立命館大学産業社会学部教授

1. 社会構築主義の臨界点まで

(1) ここでの課題

構築主義あるいは構成主義は科学全般に影響を与えている(用語の使い方は、千田, 2001を参照のこと)。人文・社会科学でも同じである。なかでも社会学、とりわけ社会問題の社会学的研究分野(以下、社会問題研究)は元来、社会的なるものを扱っているので発想としては構築主義的志向性を有している。また、言語による主観的現実の再構成をめざす臨床実践であるナラティブセラピーは物語、言語、現実の連環による構築過程を重視した「対話的協働としての心理-社会臨床」を基本とするアプローチであり、ナラティブをとおして社会のもつ主流となっている物語の書き換えを意図しており、物語の再構築という志向性がある。本稿では、この社会問題研究とナラティブの領域における構築主義を扱うこととしたい。これらの領域における社会構築主義の到達点を重視し、その可能性と提起されている諸課題を見極めつつ、臨界点まで辿り着きながら、成果を継承していくべきことを確認したい。その上で、さらに諸課題を乗り越え臨界点の向こう側へと歩み出すために、批判的实在論との関係を探り、今後を模索する一助としたい。その事例として、社会構築主義、ナラティブ、社会問題研究の交差するテーマとして、「語りえないことの存在」に注目して、筆者が取り組む暴力臨床におけるアクトアウトとサイレンシングを素材として取り上げていきたい。暴力の動態を把握することが暴力臨床の前提であるが、親密な関係性における暴力はそれを沈黙化させる作用や被害者自己懐疑の作用があり、暴力として前景化する過程が重要となること、あるいはアクトアウトとしての暴力をはじめとした問題行動は言葉の沈黙と反乱する身体という特性があり、心理社会的な臨床の事例にはナラティブ化をめぐる錯綜した過程があるという理解が重要となる。そこには問題行動という実在性があり、しかもそれらが主観的に構成されてい

る構築性もあり、この動態を把握する必要があると考えた結果のテーマ立てである。問題行動、逸脱行動とそれらへの臨床実践をめぐる社会構築主義と批判的实在論が交差するというテーマの一環でもある。

(2) 社会問題の社会学的研究

社会問題研究における社会構築主義はスペクターとキツセの『社会問題の構築-ラベリング理論をこえて』(Spector & Kitsuse, 1977)が契機となっている。社会構築主義とは、社会問題をそれが社会問題であると定義し、主張し、意味づける人びとの活動やそれへの反応を軸に考察するアプローチである。したがって、社会問題の客観的状況ではなく、相互作用による意味づけに関心がある。先行したラベリング理論と系譜関係にあることから、逸脱をめぐる恣意的な定義や逸脱者の視点に立つことからみえてくることを重視し、上からの、概して権力的な社会問題の定義と対抗させるという動機のアプローチとして出立している。そこでは学問、政策、制度が定義する社会問題の内容というよりも、人びとが社会問題であると主張していく諸実践を観察するという姿勢が示されていた。この点ではエスノメソドロジ-的な関心と重なり、シュッツの現象学的社会学がとらえた日常生活の理論、そしてエスノグラフィー調査とも重なる。

また異なる背景としては、社会問題の政治経済学(あるいは社会科学)、マルクス主義的な社会問題研究との差異化の必要もあり、社会学的研究であることを強調し、どちらかといえばポストパーソンズ以降の社会学的な関心に傾斜してきたのが社会問題の社会学的研究である。相互作用や関係性の重視、社会的行為に照準したアプローチ、ディスコース研究、フーコーの生=政治論や系譜学的分析に依拠した社会問題研究といえる傾向がある。

こうして逸脱理論研究や社会問題研究では構築主義的な手法が多く用いられるに至った。さらに人々の実践活動や主観的定義に力点を置き、それらが社

会問題を対象としていることもあり、また言語論的転回を経た後の方法論でもあることも加味されて、問題解決や臨床実践にかかわるナラティブアプローチと接合されていく流れがある。社会構築主義、社会問題研究そしてナラティブアプローチが重なるテーマを例示すると、たとえば発達障害、ひきこもり、不登校、ドメスティック・バイオレンス (DV)、ストーキング、過労死、過労自殺やいじめ自殺、ブラック企業、ハラスメント問題、若年妊娠問題、子ども虐待、高齢者虐待、各種依存症、精神疾患等、数多い。

また社会問題研究では「被害者なき逸脱」問題もあり、社会構築主義的分析と親和性がある。例えば薬物使用についての社会的定義の変遷がある。各種の薬物取り締まり法令違反者と考えれば犯罪者であるし、薬物が大量に存在している社会における依存症者と考えれば病者となる。刑事事件なのか、公衆衛生の課題なのかと分岐し、社会構築の実相が異なる。社会政策としては「ゼロトレランス (不寛容) 政策」による厳罰主義、治療としては断薬主義を原則とした強い介入を採用するのか (多くのアジア諸国)、それとも代替薬物を用いて当人と社会にとっての有害性を少なくしていくハームリダクション政策 (有害性を除去することを優先し、代替薬物を与える政策) を採用するのか (欧州諸国) という大きな違いとなり、それぞれに社会構築過程が見いだせる。

同じようにして、性の商品化論もある。売春から売買春へという言葉は定義の変化を伴っており、男性の側の買春行為を批判するための定義変更だった。ポルノグラフィも同様な対立をもつ問題である。対人暴力では、夫婦喧嘩とDV、躰と虐待、体罰と指導、いじめと遊びのような悪ふざけ等、定義の変更を含めて広く捕捉するようになり、新しい法律も制定される等して、社会構築過程が確認できる。枚挙に暇がない程、社会問題研究の分野で例示できる。

もちろん、社会科学、人文科学全体を俯瞰すれば、社会問題研究それ自体の歴史は長く、蓄積のある分

野である。貧困、差別、排除、抑圧等が共通した主題である。筆者も部落問題について研究をしてきた経過がある (中村, 1987, 1983, 1993)。それをどのような性格の差別問題として定義するか、いかなる社会運動とするか、社会政策としてはどのような対策を講じるべきなのか等として厳しい論争があり、今日言うところの社会構築主義的な議論の様相を呈していた。しかしそうした社会問題研究は、ナラティブターン、つまり言語論的転回以前のことであり、ナラティブ、主観的现实、意味付与過程に特化せず、社会構造と社会問題の関連、特に資本主義社会における社会問題の構造を把握する志向性を有した分析課題を設定していた。具体的な社会問題対策論として、公害や薬害の被害、ハンセン病患者の隔離政策、貧困問題や低所得層問題等は資本主義社会の構造問題としての理解や変革課題を直接の射程に入れてきた経緯がある。とりわけマルクス主義的な社会問題研究はこうした意味での社会分析をとおして社会構造が生み出すびとへの苦難の歴史や必然性を強調してきた。

一般に英語圏の社会学分野における社会問題研究は、社会構築主義に限定せずに必ず位置付けられている領域である。そこで扱われるトピックスも数多い。グローバル化、貧困、環境、犯罪、戦争・テロリズム、難民、ジェンダー等が扱われている。必ずしもミクロな相互作用や日常生活にかかわる社会問題群だけではなく、貧困・格差、排除・差別、暴力・虐待、リスク・監視、テロや戦争等を軸とした社会問題として多様に扱われていることがわかる。

(3) 多元的社会的社会問題研究

ナラティブターンを受けて展開されるようになった社会構築主義の隆盛は社会の動態とも関連している。それは多元的社会における社会問題把握の所産であるといえるだろう。構築主義を必要としている社会であり、社会問題の定義それ自体が葛藤を含む、あるいは深刻な対立がある多元的社会という意味である。系譜を辿れば社会病理学におけるラベリング

理論が提起されてきた経緯と類似している。ラベリング理論は米国社会の現実を反映していた。たとえば、犯罪や非行の取り締まりが選別としてマイノリティを対象にしやすいこと、中絶や十代の妊娠をめぐる定義は同じくマイノリティとジェンダーがクロスする恣意的定義となりやすくマイノリティ女性に不利な定義となること、薬物使用についてのドラッグ戦争も同じような葛藤を含んでいる。売買春、ポルノグラフィをめぐるとの性的商品化をめぐる論議、憎悪の連鎖としてのテロの背景と対応、ゼロトレランスによる積極的逮捕政策や処罰中心の脱暴力化処遇で家庭への介入を可能にしたDVや虐待への対応策等も同型的である。そこには多様な社会問題があり、その定義や政策のあり方をめぐって合意の調達の仕方が変化してきた。

こうした社会では葛藤を含んだ争点先鋭化されやすく、時には価値の対立にまで拡大されていき、議論過程自体を記述の対象にすることのできる方法の構築が社会問題研究に濃縮されたかたちで要請されたと考えられる。そして価値の対立だけでなく、人権が多様に拡大してきた経過を反映して、時には相反することもある利益間の調整が前景化するのが多元的社会である。こうした社会動態の反映であることも無視できない社会構築主義の隆盛である。

(4) 存在論における恣意的な境界設定—オントロジカル・ゲリマンダリングの指摘

もちろん社会問題対策にかかわる社会政策は必要で、どのような定義に基づくのか、いかなる課題を優先し、どのように焦点化するのか、つまり線引きをするのかは争点であり、それが政策形成の常とはいえ、対策や政策としては恣意的なものあるいは不十分なものであると批判を受けることが多い。社会構築主義はこうした過程を「存在論における恣意的な境界設定 ontological gerrymandering」として指摘した(以下、存在論的囲い込みと表記。ウールガー、ポーラッチ、2006: 185-213)。この意味は、都

合の良いように選挙区を勝手に改変するゲリマンダーという言葉を用いて社会問題の恣意的な定義が存在することをとらえようとしたものであり、選択的相対主義の見地から社会問題化がはかられていく様相を把握する概念である。存在論的囲い込みをもとにして、社会問題研究の一連の言説、政策、制度、データ、解決法等が組成され、編成され、実装され、ひとつの構築物ができあがり、それは「社会問題のポリティクス」として機能する。社会の争点が重層するアリーナ(主戦場)として構築されるにいたる。

そのアリーナが構成される過程には、複数のアクターが参与している。社会構築主義はその社会過程に注目し、動態を記述し、批判的な議論の俎上にする。社会問題が社会的に認知され、定義され、発見され、臨床化され、社会実装され、成果を評価され、さらに定義が一部訂正される等のループを記述する。同様に研究活動もその社会構築の一環があるので、研究者のポジショナリティを問うことも可能となる。

また、社会構築主義は冷めた視点から、①存在論的囲い込みという恣意的な定義に奔走する道徳事業家(道徳十字軍)が存在すること、②問題の隠蔽や不可視化作用があること(たとえば10代の妊娠・出産問題をはじめとしたエスニック問題を前景化させない定義)、さらに③個人問題へと解消する社会の心理化・臨床化の落とし穴等を指摘してきたといえる。こうした経過をみると、社会批判的な見地をもとにして社会的現実が劈開されていく思考であると位置づけることができる社会構築主義のもつ可能性を無視できない。

(5) 社会構築主義の臨界点に留まることの意義—逡巡と批判から

しかし、社会構築主義への批判も数多い。たとえば、①その組成体が言説的に指定されるどころか実体としても機能している点が等閑に付されがちなことである。存在論的囲い込みの恣意性を穿つための構築過程の把握とは別に、それを乗り越える別の言

説的な編成体を組成する回路もまた構築主義的に自己言及せざるを得ず、そうすると終わりのない回路に入り込む。構築主義はこうしてラビリンス（迷宮）に陥る。その間に、その言説編成体の実践と政策が実行されて社会問題対策がすすみ、社会構築過程として強化されていく。

別の批判としては、②社会構造の問題へと届かないこと、③社会的現実の変革の論理が見えづらいこと、④社会問題の解決への道程が欠如していること、⑤方法的な相対主義へと陥ること、⑥社会構築主義では届かない問題があること等、批判的な指摘がある。たとえば、ナラティブの臨床社会学を展開する野口は「社会構成主義が相対主義の徹底をもたらし、研究者の言語ゲームに陥り、ニヒリズムへと『退却』してしまいかねないことをいかにして回避することができるのか。……相対主義は『社会問題の記述』には役立つが『解決』には役立たない。社会構成主義は『問題』の成り立ちについて傍観者的に記述する。この姿勢こそが『問題』にまつわる『当事者性』を消し去るように作用して、『研究者のゲーム』を完結させる」という（野口、2005: 25-45）。

さらに、北田は「存在の金切り声」として歴史記述における構築主義の問題点を指摘する。「〈構築されざるもの〉の権利を賞揚し、その際、ホロコーストを否定する歴史修正主義批判を念頭に置き、たった一人の承認の声を耳にしてなお、過去そのものへの問いを宙づりにしておく構築主義あるいは歴史学の歴史性・政治性を解剖していくメタ・ヒストリーに留まり続けることもできない」という（北田、2001: 269-270）。

その歴史修正主義批判を展開する高橋は、「語りえぬものと記憶の非場所」という。「記憶そのものの否定、解釈そのものの否定、物語そのものの否定として生起する」（高橋、2012: 28-34）のが「歴史修正主義」であり、それは「記憶の消去という完全犯罪」や「追憶する人びとの記憶をも完全に消し去ること」となり、その結果、「語りえぬものを物語＝叙述の仕方では語ることは不可能」としてしまい、「一

定の筋や起承転結をもち、一つの整合的全体として秩序づけられる通常の言説という形では語りえないこと」を生起させる。しかしそれでも「証人たちが断片的に発するいくつかの言葉が、物語＝叙述としては挫折するまさにそのことを通して、語りえぬものをかろうじて示唆している」ことになり、聴く側としてはその「証言の言葉は詩的な言語に近づく」（高橋、2012: 9-32）ということ意識すべきだという。言語による物語をとおして構成される現実という言い方とは程遠い、言葉にならない向こう側があり、それを忘却するのでもなく身体と精神の記憶として秘めておくこともあるという。つまり、語りうるものだけを聴くのではなく、その前後に語りえないものがあることへの配慮である。筆者なりにいえば、ホロコーストや従軍慰安婦の経験を疑うことまでも多元的社会は放置してしまうのか、その言説を許容する相対主義に陥ることに社会構築主義はどう向き合うのかという問いとなる。

さらに社会構築主義は言語論的転回を前提としている。臨床実践と社会構築主義の関連について野口は「①現実社会的に構成される。②現実言語によって構成される。③言語は物語によって組織化される。」と整理した（野口、2005: 34）。言語論的転回は言語と物語と現実の関連を強く想定している。この点にかかわり樫村は構築主義の限界を次のように指摘する。「構築主義理論は、人間や社会の構築性を記述したが、他方でこれまで維持されてきた人間の生きられる条件や構造が実際何であるのかは論じられず、それゆえ現在起こっている人間と社会の解体に対し、必要とされる社会の再構築を考察できない。構築主義のこの困難は言語至上主義にあり、すでにできあがった言語の共時体系から出発しているため、再構築可能性と関わる、言語構造の生成や言語と主体の結合の条件を論じられない。理論的に見れば、言語の内部からのみ記述するため『自己言及のパラドクス』という難点を抱え、これを脱パラドクス化している身体や主体等を論じられず、言語化できない身体や主体を唯物化・本質主義化するこ

ととなる。」(樫村, 2004: 195) と。

これらの構築主義批判を重ねると、社会が強いることにもなる「沈黙すること、語りえないこと、語りにくいこと、忘却すること、言葉による拘束」のテーマを社会構築主義はどう扱うのか、物語化という作用は比較的まとまった意味の体系や整理された記憶を想定させるが、それらが「あやふやであること、断片化していくこと、統合されていないこと」を、特にトラウマ体験を扱う臨床は射程に入れるべきである点をどう対象化するのか、そして社会的現実の変更はどう応答できるのかというテーマがある。別言すると、言語の外部にあるもの、実在的なものの存在、つまり制度、現実、自然(人間の死を含む)それ自体の位置付けが構築主義批判では共通に指摘されている。

また、社会の中で主流となっているドミナントな物語の書き換えをめざすナラティブセラピーの実効性ともつながる諸論点もある。ドミナントな物語は社会構造が期待する行為の道程であり、意味と相互作用に入り込み、自己の方向づけをも規定する意味付けの権力作用だといえる。ドミナントな物語を構成する諸力は社会構造に由来する。何かがかかってに構築されていくのではない。その何らかの社会的諸力は基軸性をもっている。物語は言説的な実践であるが、その外部にある非言説的なものとの関係づけや全体をどのように統合するのかについて現代思想は多様なアプローチをしてきた。社会構築主義をめぐる諸論点もそこに収斂する。たとえば、「呼びかけを通じた主体形成、イデオロギー作用、重層的決定(アルチュセール)」、「言説と権力の規範(ノルム)形成作用、臨床医学の誕生による言説共同体(フーコー)」、「構造化の理論(ギデンス)」、「階級による統一化役割とヘゲモニー(グラムシ)」、「行為遂行的なジェンダー作用(バトラー)」等の物語を編成する社会的政治的な諸力の概念化の経過が社会科学論にはある。ポストマルクス主義の政治理論を整理したラクロウとムフはこれらの全体を「接合 articulation と 言説 discourse」とまとめている

(Laclau & Mouffe 1985: 109)。

(6) 社会構築主義の可能性の継承とドミナントな物語の書き換え

こうした批判もありすでに社会構築主義はいくつかに分化していて単一のものではない。徹底して実在的なものを否定する厳格な構築主義アプローチがある。これは言語論的転回を重視し、言説とシンボルに限って社会構築主義を位置づける。他方で、コンテキスト派と名づけられたアプローチがある。よりマイルドな見地で、構築過程における社会問題の実在性を承認し、より現実的なアプローチである文脈派構築主義(コンテキスト派)である。メンバーのクレームをこえて世界に認知されている社会問題の実践の状況を見る(この整理は、平・中河, 2006: 285-328)。この二つに分化した構築主義アプローチの差異は、客観的なものをどう扱うのかが論点である。日本における社会問題の社会学的研究において社会構築主義を牽引してきた平と中河は経験的な分析を重ねることの重要性を語っている。具体的な社会問題の社会学的研究にそくした記述を追求するなかで折り合いをつけることが生産的だと筆者も考える(平・中河, 2006: 285-328)。

現代日本社会でも「社会問題の変容」は確実に進展しており、社会構築主義の限界までその可能性を発揮できる記述対象はたくさんある。たとえばひきこもりや不登校問題がある。問題を表現する言葉の変遷が顕著な領域である。不登校という言葉は幾多の変遷の結果たどり着いたより包括的なものである。長期欠席・不就学、学校恐怖症、登校拒否、不登校へと定義は変容してきた。しかし共通していることは、再登校を目指している点である。行きたくても行けない事態があるのだからそうした因果において「問題定義と解決方法」をセットにすることは常道的である。

それと同時に、学習を持続させる方策が講じられて、学習者としての主体が構成されていき、そのための場、機会そして資源の保障が大切だという点に

着目すると、児童・生徒中心の見方ができるはずだ。換言すれば、「不登校児童・生徒」は現実の総体を把握した言葉ではなく、学習者としてみればまた別様のアプローチもできることになる。不登校経験も含めてその子らは学び続けている。そうするとまた異なる名付けがある。不登校という言葉では語られていないことの方が多きを当事者は語る。不登校という名付けを変更するためにもその外部からの異なる定義がもたれている。

この「問題定義と解決方法のセット」のあり方を再検討することは関連領域の複数のシステム変更を意味する。再登校・再適応だけに収斂させない解法を社会が保持するための方策の検討である。確かに学校に行かないことは少数派であり、逸脱的である。しかしそれを問題としてとらえ、再登校指導の対象とするのではなく、その逸脱性にあわせてシステムの更新を行うアプローチを採ると、選択肢の拡大、定義の再構築、制度の更新・革新へと至る。具体的には、学校だけではない学びの場の創出や持続的な学習者としての成長の保障を検討していけば、システムは寛容になり、ユニバーサルなデザインとなる。たとえば認定フリースクールの整備、個人別学習支援、ホームエデュケーションの認知と活用、学びのバウチャー制度（学習者が自由に機会と場所を選択して教育サービスを購入できる仕組み）、到達度検証試験制度によるアクセス保障等を創出し、主流の学校システムに接ぎ木する。これはシステムの柔軟化となり、学習者主体の多様な学びのニーズに応答できる。

何かを問題だと定義して当該のシステムの内部で解法を求めただけだとそれは単なる適応や順応でしかない。社会臨床論としてはそのシステムの更新を考える。まずはそれを語る語彙、文脈、定義の再検討を行う。言葉や定義も枠を広げないと解法や実践も豊かにならないからである。主流となった問題の定義や逸脱を語る言葉だけではなお語り得ない、語りにくい、語られないこと、つまりそこには外部、沈黙がある。さらに語り方も既製品のように主流と

なっているモードに依拠するとその沈黙のなかにある可能性を切り捨ててしまうことになる。同じようなことは、ひきこもり問題のゆくえ、対人暴力における加害者対策、いじめ加害への対応、自殺問題（とくに動機の語彙や責任帰属問題や遺族の自責心の構造等）、薬物依存をめぐる断薬と厳罰主義の矛盾等のテーマがある。これらの一つ一つの具体的な社会構築主義的な経過の歴史の記述をとおして、それがいかなる社会的編成や集合体として組成された問題群として位置付くのか、そのことの記述をとおして当事者の苦悩や困難が和らぐための再組成へとむかう、つまりナラティブをとおして社会的現実が変更されていく方策の示唆ができるための社会的条件づくりが要請されている。

2. 沈黙する言葉（サイレンシング）と反乱する身体（アクトアウト）

(1) 沈黙と語りえぬことへの関心

社会構築主義は言語論的転回を基軸にしている。そのことの可能性と批判の双方を見極めるための社会問題の事例として暴力ならびにそれを乗り越える暴力臨床を取り上げてみたい。対人暴力から国家暴力まで、そのナラティブをめぐるポリティクスは同心円的である。特に、語りえぬことや沈黙が暴力の被害と加害の双方に含まれて存在している。だからナラティブ論は、ナラティブされざる部分、ナラティブできない部分、つまり非ナラティブの部分、要するに沈黙をどのように視界におさめるべきなのかという問いを排除してはならない。

多様な諸困難や問題行動を対象にする臨床実践はもちろん沈黙を扱っている。語りえない事態、つまり言葉が沈黙する時、身体をとおして問題が表出する。アクトアウト、つまり行動化である。暴力はその典型であり、身体の反乱である。さらに沈黙は多様なかたちをとる。強いられる沈黙、防衛としての沈黙、排除としての沈黙、自己否定としての沈黙等である。語りえぬことをいかに承認して、対話的協

働を始動させ、展開するのか。それをナラティブのポリティクスとして理解すべきことを常に意識している。これらを踏まえて被害のナラティブ、加害のナラティブ、苦難のナラティブ、受難のナラティブという諸相がとり出せる。「語りえぬこと」の様相は、沈黙、無視、忘却、洗脳、同化等多面的であるが、それらは記憶と回復・責任をめぐる社会的な諸力の産物でもあるので、総称してここではサイレンシングとして考察を加えていく(中村, 2004, 2005, 2006, 2012, 2013b-c, 2014a-d, 2015a-d)。

(2) 物語の事後性と語られたことの外部

ナラティブの臨床社会学を構想する野口が定式化したようにナラティブアプローチと社会構築主義は相補的である。この関わりを踏まえて物語性を対人支援に組み込んだ手法にライフストーリーワークがある。児童自立・児童養護にかかわる領域で専門化されてきた。子どもたちが自らの生育歴を把握し、物語ることのできる支援をめざす。どんな施設や制度であれ、本人情報の記録の保存と所有の保障は臨床支援の基本である。それをもとに自己物語として編み上げ、一貫した自分の人生として意味づけていくことができる。とりわけ不妊治療の進展、養子縁組の事例、離婚や再婚による親子関係の変化、何らかの事情で血縁的な親子関係が切れていく場合等が拡大している現代社会ではライフストーリーワークの応用範囲は広がっている。基礎は個人情報とは何かが明確にされ、それが相当の期間、保持され、それへのアクセスがきちんと保障されているかどうかである。

ライフストーリーワークは事実としての情報の保存だけではなく、人生の意味づけをも含む広い作業をおこなう。意味づける作業はその人独自のものである。多くの場合、既製の言葉や定義からこぼれ落ちる現実を生きていて、時には言葉にならないからこそ問題行動化しているので児童自立と児童養護の支援が関与する。そうした経験の総体を自らでは説明できないこともあり、語られていないことや語り

がたいこと、語る側の躊躇や隠蔽もあることに思いを馳せておく必要がある。

また、聴く側の了解の幅が狭いかも知れないこと、つまり聴く力が及ばないことの自覚、そして社会の側がつくるあるいは期待する物語化の文脈があること等、ナラティブにまつわるこれらの「せめぎ合い」がライフストーリーワークをとおしてみえてくる。これらへの配慮が欠如すると、語られた事以外を排除することに陥る。相互の了解の世界だけでは閉じた対話となり、理解しあったようにみえるかも知れないこと、つまり何かを排除した上で成り立つ、対話という名の「共謀するモノログ世界」に陥るかも知れない。

ナラティブアプローチへの関心は「複数の声(多声的なもの)」を大切にすることを意味するので、沈黙の考慮は重要な要請でもある。ナラティブの研究はこうした外部への、つまり語られていないこと、語りにくいことがあることを前提にし、それに対して自覚的であることを聴く側に要請する。もちろん言語化の外延は計り知れない面もあるが、少なくとも次に詳述するサイレンシング(社会や他者が沈黙を強いることであり、これも暴力の効果として存在している)を視野に入れ、社会が用意している物語化の文脈について承知しておくことは大切だと考える。その語りの言葉で用いられる言葉や概念それ自体がすでに社会の物語によって染色されていると思うことも必要だと考える。

ナラティブセラピーをとおして可視化されているライフストーリーワークは以下に述べていくサイレンシングによって表面化したものだと考えると、問題にまみれた物語をとおして、問題と解法の歴史(これを家族システム療法論では「問題トーク」という)だけを見るのではなく、活性化できていないものがあるとも考えることもできる。相互作用をとおしてみえるようになっただけのことであり、埋もれた歴史が自分のなかにあると気づくことが、被害のナラティブではストレンクス(強み)の発見になり、加害のナラティブでは責任と謝罪への語彙と文脈の

構成として意味がある。暴力臨床では被害も加害も語りは弱い。だから沈黙はその外延をみると未開の知となっている。もちろん闇でもあり、影でもあるので、そこへの関心は語られたこと以上に読み取り、聴き取る力が要る。とりわけ逸脱行動や問題行動の渦中にいた人たちとの対話からはそうしたことがみえてくる。語られていないこと、語りにくいことに注目することで見いだされる。記憶の外部に置かれたもののナラティブ化とサイレンス／サイレンシングは相補的な関係にあり、可能なかぎり沈黙のなかにあることを言葉にしていく協働作業として臨床や対人援助が成立する。物語が事後的に構成されることをナラティブセラピーは意図している。当事者にとっての現実感を構成し、自らの主体を構築するという意味があり、ドミナントな物語、社会の物語の単なる上書きではないもう一つの、対案（オルタナティブ）の物語を編成する支援がナラティブセラピーである。サイレンシングを視野に入れるとそこで協働する臨床家の倫理として、その対話的協働のなかに、誘導、指示、誇張、捏造等の作用が含まれることへの配慮も要請されることになる。

(3) DV におけるサイレンシングについての研究

① 暴力とサイレンシング

対人暴力の多くは以前からあったが、社会問題としての公的な関心や認知が遅くなるのはサイレンシングの結果である。具体的には、加害者が暴力の一環として押しつける被害の縮小や否定、社会の側がそれに荷担することになる DV への無理解、さらに常識あるいは既存の制度がもつ二次加害的側面もある。夫婦間、親子間の暴力について、加害が自らの行為を否認するだけではなく逆に被害を非難し、沈黙させようとして動員する社会の意識や制度の総体を把握しようとする言葉が暴力にかかわるサイレンシングである。

暴力や虐待を振るう加害男性の話を聴いていると、暴力の中和化・正当化、女性が怒らせたという被害者非難、家族は私的領域であるので介入すべき

でないという意識等がでてくる (中村, 2014a)。さらに被害者もそこに巻き込まれて同調することがある。その過程の総体がサイレンシングである。その結果、親密な関係性や家庭内での暴力はみえにくくなる。暴力が広がっているにもかかわらず被害女性からの報告が少ないことにもその効果が示されている。

暴力には初期介入が効果的であるが、それが萌芽的であればあるほど公的機関も含めて気づきが欠如し、サイレンシングが効果を発揮して隠蔽されていく。しかし友人や家族は暴力に気づいているし、相談されることもある。公的機関ではなく身近な人たちが相談相手として選択されることが多いので、周囲の理解、つまり聴く力が大切となる。逆に言えば、サイレンシングの対象は周囲の人たちにも拡大されていくことになる。周囲の人の聴く力が欠如するとそれは社会の持つ無視と共軛関係となる。

サイレンシングに注目すると、単に被害者が声を出しにくいということだけではなく、社会の無理解がその沈黙を加速させているといえる。友人関係、親子関係、夫婦関係、恋人関係等、問題をはらむ関係性から離脱しにくいこともサイレンシングに荷担する。暴力を秘密にしておくように強いられるという性質がこれらの暴力の一つの特徴となる。被害者が声を出しにくいことと周囲の者へシグナルを出していることを重ねると、無関心や無理解をなくすこともサイレンシングへの対抗となる。

しかし徐々に事態は変化し、親密な関係性における暴力が社会問題とされてきた。家族に暴力を振るう男性への批判が高まる社会のなかでいかにしてそれを隠蔽し続けるのか。より巧妙になるのだろうか。それを隠し続ける努力としてのサイレンシングの詳細を観察することをとおして脱暴力のための資源として活かすことができる。犯罪に否認はつきものだが、この種の対人暴力は一定の関係性において発生するので、そこに根ざした正当化や中和化の微細な語彙と文脈を採取し、更生に役立てることができよう。そして何よりも社会のもつ暴力の容認や寛

容さがそのサイレンシング過程から透視されることになるので、啓発・防止にも資する。

② 男性が沈黙をおしつける過程の詳細とサイレンシングの特徴

18人のDV男性のインタビュー調査をサイレンシングの観点からまとめた調査研究があるので検討しておきたい (Townes & Adams, Gabey, 2003: 43-78)。これを簡単に紹介しておこう。この調査では、暴力を振るう男性は自らが暴力夫だといわれるのを回避するためにその暴力を否定する努力を重ねる様子がクリアにされていく。

まず男性の暴力の定義が異なる。平手打ちすることと拳骨で殴ることは違うといい、平手打ち程度は限度内だと考えている。他の男性と比べてまだまだしな方だと暴力を否定する。そして、ろくでなしの奴らの暴力と自分の暴力は違うと言い訳する。自分の暴力は常態ではないこと、たまたまその日はコントロールできなかったという。どうしてそうなったのだろうかと問い、そうさせた妻にも原因があると責任転嫁する。そして殴ったのは数回程度の暴力だったと過小評価する。個人のなかで勝手につくった暴力のヒエラルヒーをもとに判断している。この言い訳一覧表は男性同士の暴力をもとにしていると筆者は想定する。殺人に至るような暴力的な男性と比べての独断的一覧表だろう。そしてこれ以上、暴力を語らないし、暴力を説明する言葉も欠如している。思考停止状態だといえるだろう。

この研究の概要をまとめると第1に、サイレンシングには相当な努力があるので主体的で意図的であるといえる。また、サイレンシング過程に妻も同意しているという幻想を保持している。「家のなかのことは絶対に他には話さないものさ」という。しかも外ではいい顔をする。だからその内外の落差を埋めるためにサイレンシング行動は能動的となる。

第2に、暴力を振るう男性は自身を「合理的な男」だと思っている。妻がいつもヒステリックだといい、感情的に生きているが自分は異なると言い張

る。私はそれに対処してきたのだと暴力夫は言い張り、事件はいつも彼女が感情的になるから起こるのだと説明する。警察の前では理路整然と説明し、自分は理性的で合理的だと印象づける。感情的になるのは女性の方であり、暴力へと昂じていくが、その暴力は家庭内の論争の延長線上にあり、自分はそうした事態になることは理性的によくわかっているつもりだが、妻がヒステリックに騒ぐからそうせざるを得ない面があるのだと言う。

第3に、説明がつかないことを覆い隠すという矛盾がある。一方では、彼女が怒りを増幅させたといいいながら、他方では、暴力を振るうことは恥ずかしいことだとも思っている。恥ずかしいことだから隠す。男性として強いはずの自分が暴力を振るってしまったという意識である。弱者へのいじめと変わらないと内心では思っている。社会的にも受け入れられないことだ。こんな男性は男らしくない。男らしいと思って振るう暴力が男性の自己否定につながっている。暴力をふるってしまったことと社会的な言い訳の説明が矛盾する。そこで用いられるのが自己にむかうサイレンシング、つまり自ら押し黙ることである。根本の矛盾を覆い隠すためであり、アイデンティティを保つためである。この矛盾した意識を支えているのが、強さとしての沈黙の文化である。男らしさが寡黙さと重なる。暴力のことを誰かに相談するとそれは弱さの証明になってしまい、男らしさのセルフイメージ (マッチョ・イメージ) に傷がつくと考えている。暴力は男性の特性でもあるが、それが親密な関係性における暴力としては弱さの証明ともなる。このセルフサイレンシングという選択は余計に都合がいい。こうして言葉が欠如していく。そうするとますます感情が鈍磨していく。言葉がないと感情が構成されないからである。失感情症的な男性の心理と重なる。

さらに被害者もまたサイレンシングに巻き込まれる。暴力で悩んでいると第三者に話すのは裏切りであると思わせられている。そして女性の罪意識に訴える。これは沈黙を強いることでもあり、暴力の原

因についての曖昧化として機能する。背景にあるのはジェンダー意識である。「女性は癒す人、男性は傷ついた主人様」という態度である。暴力はその癒やし方が足りないからだといわれる。さらに男性が暴力で受ける社会的な制裁の弱さが暴力の曖昧さを構成する。

この被害者へのサイレンシングは巧妙である。彼女が暴力を促進させたといひ、それは挑発であり、誘発のボタンを押したのは妻であるという。そこで動員されているのは、「男性は機械」というメタファーである。瞬間湯沸かし器にたとえることも同じような男性機械論である。本来は自らの意思をもって関係性に臨んでいるのだから、暴力への責任は自己に帰属するはずだが、関係性に帰責させるとそれは両方の責任となってしまう。この関係性意識を変えるには社会のジェンダー意識や役割意識の変更が必要になる。暴力臨床は社会臨床的なテーマであるゆえんである。

また、命題風の言明をもちだす「打ち切り」というサイレンシング行動がある。たとえば、そうした暴力は「自明で、あたりまえのことさ。それはそういうもんだ、そうに決まっている」等の言葉で会話をしない方策をとる。これもサイレンシング作用である。

さらに、「コップのなかの嵐」であるとし、暴力への相手の関心を矮小化し、些細なことだとする。些細なことにこだわる女性が問題だという。女性への侮辱でもある。妻の行動は子どもじみているという言い方となる。そんな細かなことにこだわり、文句をいうのは成熟していない、非合理的な、メンタルにおかしい証拠であるという言い方もある。

そして、友人や家族をサイレンシングに駆り立てることもある。たとえば、暴力についての「曖昧な会話」というのがある。暴力を振るう男性はもっともらしいことをいう。妻の目の周囲にアザがあり、時には骨を折っていることもあるが、そのことを第三者に説明する時、「転んだ」と言うだけである。あまり詳細を説明せずに聞き手の質問をひきだす。

あいまいにこたえながら自分相手の推測に依拠し、頭が真っ白でよくわからなかったと逃げてしまい、何が起こったのかと聴き手に意識させる。まるで酔っ払っての悪態と同じで無意識下の過失だといわんばかりである。

他にも、これは関係性の問題だ、男性の家は城だ(私的な領域という意識の表現)、家の恥を外に出すな等というサイレンシングのやり方が指摘されている。

③ 関係性の病理

ここでの対人暴力は、怒り、恨み、嫉み、鬱憤、甘え、依存をもとにした、特定の人を対象にする、親密な関係性に宿る暴力である。サイレンシングを加速させるのはこの親密さという「関係性の特性」にある。それは多様なかたちをとる。被殴打女性症候群(DVを受け続けた女性の心理的特徴としての嗜癖的な関係性)、虐待を受けた子どもが示す症候群、特定の事項への反応としての激怒型暴力(思うようにならない道路事情や周囲のドライバーへの運転中の激怒が典型的。さらにヘイトスピーチにみられる憎悪的激怒も同型的な対象選択理由である)、抑制不能な性的ファンタジーとその行動化としての性犯罪(同様に性的存在としてのみ女性を意味づける意図的な行動)、代理ミュンヒハウゼン症候群(母性の歪み)、嬰兒殺的心理(産後うつが悪化による破壊的衝動等)、性的虐待を受けてきた人に見られる性化問題行動、歪められた愛着とトラウマ的な絆の形成、長く監禁された心理としてのストックホルム症候群、相手を貶めていくモラルハラスメント(ガスライティングともいう。中村, 2014c)等である。暴力臨床はこうした特定の関係性で生じる暴力を見据えつつも、当の個人の内的問題にも対応することになる。その際に、動機付けからはじめなければならない。さらに関係性の歴史や連鎖もあり、長期にわたる変化を見通さなければならない。

さらに社会臨床的な課題も加わる。男性の、家族関係において生じる暴力は、ジェンダー作用として

の「構造的暴力」である。また、暴力は相手が悪いのでそれ糺すための正義であり、愛情の証しでもあるし、コミュニケーションの一手段であるにとらえているのは、加害者だけではなく社会そのものである。暴力を振るい、虐待を加える者はそれを濃縮し、養分のように吸収して正当化している。暴力を振るう人たちは、否認的であり、他罰的であり、許容できる暴力だという。彼らの行動はそうした社会の暴力を可視化させた象徴でもある。

そして認知の仕方あるいは思考の道筋が独特である。それらは親密な家族関係をとおして構成されていく。とくに夫婦、親子、恋人という非対称な関係性に根ざした認知と思考の仕方となっている。例示すれば、互いに訴求する関係性、生活を維持しようとする特性、対になって生き延びる戦略をつくる間柄から生じる認知と思考のパターンがある。その特性に相応しい形態で暴力が懐胎する。

もちろん非対称な関係性はアタッチメントの基礎ともなるが、被害-加害をも宿らせるという両義性をもつ。その関係性では、間歇的に暴力が発生し、両者の関係性の襞に入り込み、時には被害者が自己を責めることもある。こうした関係性であることを踏まえて暴力臨床のナラティブセラピーが展開される。認知行動面の変容を促し、暴力へと至る人生の経過を聴き、贖罪のための語彙と文脈を構成することに寄り添い、更生と規範の確立を支援する。脱暴力化にとっては暴力の定義から再構成の取り組みをはじめていくことになる。動機形成はサイレンシングを推定して、物語の事後性に根ざした動機構築となる。語られていないことの方が多様にあるので、暴力という行動化が可能となったのはその沈黙と対になっているという背景をとらえ、これを劈開する対話的協働作業を行うことになる。

④ 被害のナラティブと沈黙-抑うつとサイレンシングの関係について

さらにサイレンシングは被害のナラティブにも影響する。これは疾病のジェンダーの領域でも議論さ

れている。性差医学という領域があり、性差のある病気を扱う。たとえば、うつ病相しか示さない単極性うつ病と躁うつ両方を示す双極性障害(躁うつ病)のなかでも男女差がはっきりしている単極性にこの性差が確認できる。概ね女性は男性の2倍程度の罹患率とされる。自己を沈黙させる病と位置づけた医療の人類学的、社会学的な研究がある。サイレンシングの研究として対象となってきた。他にも、病と沈黙の関係について、抑うつと自己沈黙等が扱われる。予防、セルフケア、病からの回復、HIV/AIDS、がん、摂食障害、心疾患との関連等も指摘されている。たとえば世界各地のうつ病の医療人類学、社会学研究者の研究がある(Jack & Ali, 2010)。多様な文化における精神科外来での経験をもとにしたアプローチを紹介している(以下はこの書物のイントロダクション、Culture, Self-Silencing, and Depression: A Contextual-Relational Perspectiveの紹介である)。異なる文化性と相関の強い精神疾患で考慮すべきは、家族関係への拘束、伝統的な義務への拘束、スピリチュアルなものへの強いつながり、罣や自己欺瞞との闘い、恥・怒りの感情と自暴自棄の傾向が重なる文化拘束的な病という側面であるとし、その中核にサイレンシングを位置づけることができる文化があることを指摘する。

男性中心社会において感じる女性の感情でもあり、ジェンダー作用を指摘している。ジェンダーの非対称性のラインに即して女性性と不可分に発現する特徴をとらえている。ジェンダー作用からすると、サイレンシングの結果の自己沈黙は、あらかじめ規範、価値、イメージによって処方されているという。気持ちよさを提供すること、利己的ではないこと、愛情を抱いていること等の女性像に束縛されるとする。自己モニタリングによる否定的な自己評価、文化が期待すべき像と自己実現との葛藤が女性のうつ病にはみられるという。女性患者のナラティブをとおしてデータが採取されている。別言すれば、他者のニーズにあわせて自己をみること、自己表出を監視する、怒りを抑制する、自立的な行動を控える、文

化が期待する女性像に抗した判断をしない特性が分析されている。これらの女性性は抑うつへの脆弱性をつくる。さらに社会的不平等がかさなり自己非難的なことも加速し、抑うつへとかりたてられる。

これらをまとめると、第1に、外在化された自己認知・自己知覚がある。外的な基準によって自己をみるスキーマができています。他者が私をどうみているのかという視点から自分をみる傾向である。サイレンシング尺度では自らの基準では自分を評価しない傾向を取り出している。

第2に、自己犠牲としてのケアの視点がある。自己よりも他者のニーズを前景化させる傾向をおしはかる。愛する人たちのニーズと同じほど自らのニーズを考えることは利己的だと思うという意識である。関係のなかのヒエラルヒーとしてのニーズの優劣をつける。そうすることが自らの道徳だと言い聞かせ、怒りを抑圧する。他者と同じようにそれ自体で価値があるというのではない低い自己評価のもととなる。自己犠牲と母性の密接さをはかる尺度もある。

第3に、自己沈黙（セルフサイレンシング）である。関係を維持するために、喪失や報復を回避しようとして、自己表出や行動を抑制する様相をとりだしている。相方のニーズや感情と自己のそれらが衝突するときにはひきさがる。身近なひととのトラブルの原因となるので自らの感情を葬ることがある。

第4に、分裂した自己がある。外部にみせる偽りの自己と隠された感情と思考をもつ内なる自己の分裂である。前者は相手の希望に即したものである。

さらにこうした特性をいくつかの女性サブグループで検証している。女子大学生、薬物依存の母親、DV被害女性の各集団である。最後の集団がもっとも高いサイレンシングの効果を示したと報告している。こうしたサイレンシング研究は、性差というよりもジェンダー差を示している。

そうすると、男性の沈黙の研究も必要ではないかと筆者は思う。ジェンダー差の他方の極にあるテーマである。男性のもつ集団としての特権とかかわり沈黙することの意味が男性では異なると思う。サイ

レンシング研究で男性の沈黙は、他者との距離化、相互作用のコントロール目的、自律を防御することの意味が強いと指摘されている。先述したセルフサイレンシングの選択と男性性の防御との関連に近い。別に紹介するが、男性性とうつの研究、男性の暴力の背後にある言語化の貧しさと感情の麻痺、そこから派生する行動化としての暴力等はサイレンシングとかかわるテーマ群である。

（4）社会が用意し、期待する「悪のドラマ化、選択の賛美、不幸の逆恨み」という物語化を超えて「複数の声を聴く」

インタビュー調査であれ、自己語りであれ、ナラティブとして表出されるのは物語として編集されたものである。現在を起点にして未来へと向かうために過去が編纂される面がある。やはり人は選択したことへの肯定的な意味づけをしたがる傾向（選択の賛美）もそのナラティブには反映される。物語のもつ構成的側面であり、物語の事後性ともいえる。

選択しなかったこと、想像しえなかったことがたくさんあり、また、ある言葉を選択した段階で、文脈にその言葉をおいた段階で、ある外部がつくりだされる。たとえば不登校やひきこもり、非行や犯罪、暴力の経過等に焦点をあてればその物語は逸脱の物語となる。これを「悪のドラマ化」という。現在の不満は過去との因果関係の連鎖におかれる。これは犯人捜しの物語、不幸の逆恨みである。ナラティブが複数の声として主流の物語化を相対化することとは別に、こうした「物語化のコード」があり、そのラインに即してナラティブ化されていくこともある。

また、ナラティブの基盤にかかわり、自分についての情報は自己所有すべきであるというのが先述したライフストーリーワークの基本視点である。出自についての情報が断片化しやすいとそれは脆弱さとなり自己物語においてはハンディとなる。社会的養護、不妊治療の結果、養子縁組の子どもたち等は自己についての情報が断片化されやすい。制度がつくりだすサイレンシングといえる。匿名のなかへと沈

黙させられていく。精子や卵子の提供による不妊治療、産みの親の関係を匿名にする養子等がサイレンシングを促進させる。児童養護・児童自立における情報保存も整備が遅れている。これらは自己とは誰なのかについて基本的情報のことなので、文字通りの意味での権利擁護（アドボカシー）、民主主義や価値の実現ともいえる。

サイレンシングは言語論的転回を経て、対話的協働をすすめるナラティブアプローチやライフストーリーあるいはライフヒストリー調査、質的調査によるケース研究にとっても、そしてトラウマ的記憶の整序をめざす心理臨床的实践と研究にとっても、さらに暴力臨床が対象にすべき被害のケア、そして加害のための語彙の創出にとっても欠かすことのできない領域である。

3. 批判的現在を導出することと創発性の分析的歴史

(1) 批判的現在をみる

サイレンシングはジェンダー作用の効果である。強いられたケア役割に随伴するので社会問題の一環だと把握できる。さらに加害のナラティブでみいだすことができる暴力を肯定する言い訳はドミナントな物語となる社会のもつ物語性を反映しているともいえる。他にも同型的なテーマがある。①社会的な背景のある自殺の動機の帰属問題（個人の責任かどうかをめぐる争い）、②対人暴力や性犯罪を誘発した被害者にも落ち度があるという考え方、③生活保護受給に関わる劣等処遇的意識を反映した福祉的支援へのネガティブさがもたらす事態等であり、枚挙に暇がない。一言でいえば「自己責任」の強調であり、個人への「問題帰責」である。また、④何らかの個人の属性をカミングアウトしづらい社会の不寛容性や社会的差別の存在もあり、社会問題として位置づけるに相応しい語彙と文脈の開発が求められる。こうした広がりのあるテーマを拓く視点として、サイレンシングがあり、そこから見える社会的現実を

把握することは重要である。そのことに社会構築主義は貢献する。ラベリング理論の系譜にある社会構築主義は、存在論的囲い込みに留意しつつも、そうしたことに敏感であるべきだからである。

この意味では、ジェンダー論を展開しているバトラーを下敷きにした竹村の社会構築主義についての特徴づけが参考になる。彼女は徹底した異性愛主義社会批判を展開する過程で、方法論としての社会構築主義に対して、「1990年代に社会構築主義が前景化してきたのはいかにイデオロギーの本質主義が跋扈しているかを徹底的に暴いたことによってだった。……アイデンティティの政治、多文化主義は……差異を個別化し、戦略的に本質化しようとする傾向がある。社会構築主義は、民主主義をめぐるどのように折り合いをつけるのか」と問い、「社会構築主義は、本質主義とマルクス主義と脱構築のあわいにたたずむ理論」であり、そのせめぎ合いをとおして「批判的現在を紡ぎ出す理論」だと指摘する（竹村、2001: 214-215）。

批判的現在の組成のためにも社会構築主義は貢献できるはずであり、ラベリング理論の後裔であるならば、日常生活に内在しつつ、それを穿つための方法論が要請されるという指摘である。異性愛強制社会における批判的現在の一例として竹村はフランスで導入されたパートナーシップによる連帯契約制度の導入をあげていた（竹村、2001: 242）。日常生活の組み立て方を広げる寛容の道であり、選択肢を拡大する批判的現在の提示である。存在論的囲い込みについて留意しつつも、その必然性について多元化社会の実現にむかう社会構築過程として記述することができればよい。

この意味での批判的現在の可視化は、「いま・ここ」に意識を係留させ、人々の実践に作用している諸力の理解を現代社会分析として行い、必要な制度や政策へと再組成させる社会構築を行う作業といえる。その諸力は社会構造に規定されつつも、批判的現在を組成する主体も育むので、再組成が実効的なリアリティをもち浮上する。その経過が記述できて

いけば、それは省察、洞察となり、リフレクションの知となる。さらに個別的な生き辛さの集積の結果でもあるので、臨床の知ともいえる。生の母胎となっている枠組みの修正になるのでマトリックスの変容となり、従来のドミナントな物語の書き換えのための社会的条件の創発ともなる。ラクロウとムフのいう「接合」の様相をみてとることができる。

(2) ナラティブセラピーは社会臨床論であること

このプロセスにナラティブセラピーが貢献する。オーストラリアのアデレードに拠点をもつダルビックセンターを主宰し、その牽引役であった臨床家、ホワイトによって練り上げられてきたのがナラティブセラピーである。言語論的転回を最大限に臨床実践に活かしたナラティブセラピーの理論と実践はオーストラリア社会の社会的現実との関連も無視できない。対話的協働による当事者とセラピストの関係性のマイクロ次元からドミナントな物語の書き換えをめざすというアプローチは、あくまでも小さなコスモスに照準した臨床の場面であるので、声高に社会的現実の変化を主張しない。人々の日常生活のリアリティに根ざした、つまり二人称関係（私とあなた）に根ざした協働的な主観的現実の変更の企てである。だからこそ主体的な物語になるという意味でのマイクロコスモスの再構築への着目なのである。そうでないと声高に変革を主張する旧来の政治へと再帰するだけだ。臨床の知はその意味で二人称的である。

しかしいずれは複数のマイクロコスモスの集積へとつながり、対案となる物語の選択肢へと至る。当事者の、セラピストの、それを支える社会の物語がそれぞれ書き換えられていくことへと収斂していくためにも、批判的に現在の有り様を点検していくことへと回路は開かれている。それを総称して批判的現在の紡ぎ出しとしていくことが社会構築主義の存在意義であれば、ナラティブセラピーの作業と重ねて、批判的現在へと言挙げしていくことで言説的共同体は再生の手がかりを得る。

このことに気づきを得たのはホワイトの「共犯関係」という言葉である。こうした言葉自体を日本の心理臨床家は使わないこともあり、社会的責任を引きうけている実践者だと理解できる。それは家庭内暴力の加害男性とのセラピーを論じた文脈である。ホワイトのナラティブセラピーはこうした加害者へのセラピーの方策を模索していた筆者には新鮮だったこともある。ホワイトはPTSDと診断されたベトナム退役軍人のセラピーに取り組みながら、暴力加害と男性と社会の在り方を指摘する。

「彼らをベトナムへ送ったのは我々であるというコミュニティの共犯性を私たちが充分には認めていないということです。それに見合うだけの謝罪および謝罪モードを見つけることもできていないのです」、「重要なのは、私たちが共に同じ男性として面と向かい、自分たちの声で虐待に対抗して話すことなのです。」、「私は後悔している『演技』と、こうした男性が自分のしてきたことを理解した時に経験する悩みの表れとを区別することは、可能だと思っています」、「虐待する男性との仕事において、私たちは、男性文化の経験について話し合います。しかし、それは、ジョイニング等というものではありません。暴力をふるい続ける男性に会う時、私には、彼らを逸脱者と見なす資格等ないのです。彼らを逸脱者と見なしたり『他者』と規定したりすれば、私は、彼らの暴力が攻撃性や支配、そして征服を尊ぶこの文化における男性のドミナントな在り方や考え方と結びついていることを曖昧にしていることになるのです。彼らを逸脱者と見なせば、私はひとりの男性として、この手のドミナントな在り方や考え方の再生産に自分が共犯している、そのやり口に直面せずにはすむでしょう。暴力をふるい続ける彼らを逸脱者と見なせば、私は男性というクラスに属するメンバーとして、男女の機会不均等を永続させ男性の優位性を支持する彼らの特権に対抗して行為をおこす責任に直面せずにはすむでしょう。……私が彼らを逸脱者と見なせば、あまりにも都合よく『責任回避』できるのです。」「私は、個人的にアカウンタビリティを

問われていると考えています。それに、このアカウントビリティと関連した特別な責任に直面化できるよう、セラピーの全文脈がどのように構造化されるべきか、非常に関心があります」(ホワイト, 1995=2000: 50-254)。

そして「男性セラピスト個人としてのアカウントビリティを引き受ける立場に立つ」という。男性のセラピストが自らのジェンダーに自覚的であり、加害男性と連続する文化を生きてきたということへの自覚をもった時に、従来の臨床的援助とは異なる説得力のあるセラピーの再構築を展望できるのだという。ナラティブセラピーに出会いながら、個人の物語の再構築をとおして社会の物語を変更しうる回路を模索することができるのではないかと考えている。

(3) ナラティブセラピーの社会的背景と出立の特徴

非対称な関係性の暴力は被害者がそれを相談できない「強いられる沈黙」、被害それ自体を自覚できず自責的な言葉となる「疎外された言語化」、親密さやケア役割のために事態を歪めて理解する「記憶の断片化」等が生起し、トラウマ的体験と記憶の抑圧を含む「被害のナラティブ」があり、さらに社会の対人暴力への無理解(どうして逃げないのか、一定の関係性があったのだから被害者の落ち度もある等)やそれを支援や司法の制度が代弁することで二次的加害としてしまうこともある。これらの結果としてのサイレンシングである。

さらに他方の加害には、中和化、正当化があり、それは社会の暴力荷担的な意識であり、暴力を振るう人格による濃縮された表現であり、彼らが加害を語り、責任に直面する語彙や態度の形成が困難なことも加わり、加害と暴力のナラティブが偏向する。被害のナラティブ、加害のナラティブの内包と外延を意識して聴く／聴き出すということがナラティブセラピーには求められる。社会の物語のもつ課題をホワイトは共犯関係といい、それを筆者は共軛関係と広く置換し、社会のもつ物語の書き換えへと臨床実践を同期させることが大切で、そこに介在するセ

ラピストと研究者は、媒介者として、つまりインタープリテーションとトランスレーション(通訳・翻訳)をする者としてそれぞれの実践倫理に即したポジショナリティを構築すべきであると筆者はとらえている。これを社会臨床としてまとめてきた。批判的現在の構築にとっての社会批判は不可欠だからである。

ナラティブセラピーそれ自体については技法的なものも含めて翻訳され、輸入されているが、こうした共軛関係という厳しい指摘と、その成り立ちの背景にあるオーストラリア社会のもつ社会問題との関連で生成した臨床実践であることへの理解が不可欠である(中村, 2013a, 2015b)。臨床家をはじめとした対人援助職者の反省や省察とともに創生されているセラピーであることが浮かび上がる。トラウマ的体験への対人援助は、何らかの社会問題を背景要因にしているので、個人のレベルでの臨床だけでは困難で、問題に対する謝罪や補償や責任の明示等の社会的な次元からの再定義が不可欠である。そのことによる受苦に自覚的な福祉や心理の臨床にしていく通訳・翻訳をする者として、そして当該社会のマジョリティの代弁者となりがちな専門家というポジショナリティの自覚がある。ナラティブセラピーはこうしたことを引きうける対人援助であることを意識して出立した。その前提となるのが批判的な社会理解に他ならない。批判的現在の創出にナラティブセラピーの実践それ自体が関与することがないとドミナントな物語の書き換えはすすまない。

(4) 創発性の分析的歴史の記述

批判的現在を紡ぎ出す理論あるいは方法として社会構築主義を位置づけるということは社会臨床論と臨床社会学的実践には親和的であり、ラベリング理論の継承としても理解できる。また、社会構築主義批判が提起した課題のいくつかを乗り越える手がかりとなる。これらをとおして、社会問題の社会学的研究に関わり、社会構築主義のプラス面である機能主義批判、実証主義批判を引き継ぎ、それと裏腹な

マイナス面である臨床実践や社会政策の批判に終始すること、実態として進行してしまう現実との距離がでて、結局は社会的現実の変更として機能しないこと、構築主義が知的言語ゲームの様相を呈すること、課題として実在している貧困、差別、暴力等の社会問題・社会病理の解決が求められることに鑑みると、批判的現在の創出にかかわる方法を用いた具体的な社会編成の分析が要請される。

その具体的な成果として、ローズのような批判的歴史的な現代社会分析の仕事がある。あるいは社会諸力の趨勢を把握しようとした逸脱の医療化論もある。ローズの「心理学複合体の研究 psychological-complex」(Rose, 1985) は、アヴェロン野生児の発見の意味から説き起こし、個人心理学の誕生する経過、精神の優生学、心理学的近代の形成、知的障害の構築、教育への心理学の応用、知能測定技術、心理行政の形成へと個人心理学が拡大していく英国とフランスでの経過について文献、法律、政策を丹念に分析したものである。遺伝による能力の個人差を「発見」し、その測定法を考案した経過が分析されていく。測定法の考案は、正規曲線の左側に位置するような「異常な」人々を見つけ出す科学的技術のことであり、統計的手法である。近代心理学の誕生は、実験室における人間の精神についての真理の獲得ではなく、こうした統計的な精神測定手法の考案がそれまでは教育も治療も不可能とされていた「知能の低い人」の教育が可能であるとみなされたこと、ダーウィンから派生した種の退化や優生学的関心との接合、都市の荒廃に従って住民の統治への関心が高まったこと、博愛主義的ソーシャルワークの勃興といった社会的条件と結びつくという諸要素の相互連環ができたところに可能となったという。

近代心理学は福祉国家体制を支え、個々人の福祉を最大限に実現しようとする社会体制における諸実践に埋め込まれていく。頭に psy がつく学問と実践、つまり、心理学、精神医学、精神看護学、精神科ソーシャルワークが編成され、知識と実践と政策が重

なり、一つの集合体となり、心理学的複合体を組成している様相を把握した。

さらに最近著では、続く現代社会分析として、「ソーマ的(物質身体的)人間」の形成を主軸にして分子生物学的人間の複合体が構築されており、ここでは生物学的シチズンシップ、ソーマの専門的知識の重視となっている様を指摘する。生物医学、神経科学と権力の複合体が新しい人間像を作りだしているという。心理学的近代と人間にとってかわる新しい人間観の誕生を分析している。社会構築主義的な歴史と現在の分析であり、社会の編成原理を考察し、構造と主体の相互形成過程が活写されている。

また、コンラッドらの「逸脱と医療化論」(コンラッド, 1992=2003) は、アルコール依存症、精神障害、発達障害、薬物依存、ADHD、同性愛、非行・犯罪等はどのようにして定義されてきたのかを把握する。悪から病気へ(bad to mad)の変化を記述し、生-政治的な様相が「逸脱の医療化」を主軸に展開してきたことが示されている。この研究も現代社会分析であり、構築された逸脱の変化を社会問題の主軸の変化として考察したものである。

これらは社会構成体のひとつのまとまりのある変化の主軸をおさえたものであり、編成原理との関連で何が構築されていくのかを分析しているという意味では、社会構築過程の研究でもあり、さらに実在する諸要素を結びつけ、社会的現実として機能している客観的な相をおさえている点は实在論的である。先に紹介した「接合と言説」(ラクロウ & ムフ)の具体的な分析として位置づけることができる。本稿で例示してきた対人暴力の社会問題とその解決の方策もこれらと同じような記述のまとまりを必要とする。対人暴力の社会問題研究は、それが行為遂行的で親密な関係性における相互作用とそこで形成された人格的パーソナリティを介する点で特徴のある社会問題であり、しかもジェンダー作用や家族関係による暴力の再生産過程という関係性と相互作用を把握し、解決にむけた司法の新しいシステムを要請していることの総体の考察を必要とする。脱暴力への

実践としての、被害からの回復としての、ナラティブアプローチをとおした対話的協働だけでは解決に向かうことが困難である社会問題である。その臨床を社会における共軛関係へと拡大すべきである。私的な関係における暴力の实在化(可視化)、それを可能にする価値や理念の形成(親密な関係性にはつきものだという意識の克服や治療的司法と修復的正義の理念の構成)、法と心理を脱暴力へと組成する社会技術の構成をとおした、社会構築がある。そこには社会のもつ暴力の文化や物語もサイレンシングとして作用するので、社会批判とともに構造と主体の両者の関係を脱暴力の制度構成や臨床実践に組み込み、新しい編成を創出するための概念をつくる必要がある。「接合と言説」の実践としての脱暴力化である。

ハッキングのいう何が社会的に構築されるのかという問い(ハッキング, 2000=2006)、さらに言語至上主義ではなく前言語的な沈黙せざるを得ないことや反乱する身体という視点からの臨床問題への配慮と理解、ローズやコンラッドの社会分析の手法等を継承していくことが「批判的現在」を導くことに有益だと考える。こうした意味での社会構築主義について、その肯定的な諸点を継承し、社会的現実分析の方法論として体系化する臨界点まで見極めをしつつ、紹介してきた批判点を乗り越えることを志向したいと考える。この点の素材として、ここでは暴力臨床をめぐる諸相を扱ったが、さらに広く臨床にかかわる諸課題は豊かな内容を提供することができる。批判的現在の導出のその先には批判的实在論がある。

本稿の関心からは、批判的实在論の旗手、アーチャーの『实在論的社会理論-形態生成論アプローチ』(Archer, 1995=2007)において記述されている方法論が参考になる。具体的にはイギリスとフランスの「国家的教育システムの分析」の中で定式化されている「創発性の分析的歴史」という考え方である。これは「なぜ物事が、構造的に、文化的に、あるいはエイジェント的にそのようになっていて他のようではないのかについて説明する」(Archer,

1995=2007: 492) ことであると位置づけられている。アーチャーのポストモダンへの批判が込められている。「なんらかの立証するコンテクストもなしに、選択的な知覚と論証のつぎはぎの合成と芸術的な推論とにもとづいて」(Archer, 1995=2007: 492) いるポストモダンの思潮は「物語的なものと分析的なものを相互に対立関係」においてしまうと批判する。

また、社会構築主義が、構造的なもの、分析的なもの、歴史的なものとの距離を置き、修辞学的なもの、表象的なもの、言語的なものに力点を置くと、ここで述べてきたような「批判的現在の紡ぎ出し」、「創発性の分析的歴史」から乖離していくことになるという。ある時代、ある社会のなかでドミナントとなっている物語を産出する支配的な社会構造との関係を説明できるような「接合の言説社会理論」が社会構築過程としての分析に求められると筆者は考える。

さらにナラティブセラピストが共軛関係をとおして直面する、自己の物語を書き換えるための主体へとクライアントと対話的協働の実践をとおして変容を遂げるのに必要な、ドミナントな物語を産出する意味の基盤それ自体の変更へと翻訳、通訳するためのポジショナリティを自覚すべきだというホワイトの指摘を看過できない。ナラティブセラピーを可能にする社会的条件の形成とは、これすなわち社会臨床論であると筆者は考えている。アーチャーの創発性の分析的歴史論や批判的現在の紡ぎ出しと創出は、社会構築主義の積極面を引きつぎ、具体的な複数の社会問題が交錯して存在している様態を記述し、ある編成体が構成されていく過程を統合的に説明する有力な方法論だと考えることができる。アーチャーの創発性の分析的歴史はそれを支える批判的实在論や「構造とエージェンシー論」の一部である。社会構築主義の肯定面を継承しつつも、言語的なものと非言語的なものの統合をめざし、新しい接合にむかう言説的实践への、つまり「構造と主体の再編成」にむかう方法としての批判的实在論によりやく辿り着いた。批判的实在論は広がりのある方法論であり、

科学哲学における自然と認識の関係論はもとより、本稿と類似の問題意識で社会構築主義との関係を重視している研究もあり (Elder-Vass, 2012), また本稿で扱った暴力問題のような現代の社会問題の具体的分析 (世界の貧困, ジェンダー問題, 教育システム, グローバル化, 障がい者問題, 法律と現実の齟齬, 薬物問題等数多い) にも応用された研究が数多く蓄積されている。ここでは検討はできなかつたので稿を改めていきたい。

文献

- Archer, M.S, 1995, *Realist Social Theory: The Morphogenetic approach*, Cambridge University Press (=2007, 佐藤春吉訳『实在論的社会理論－形態生成論アプローチ』青木書店)
- Conrad, P. & Schnaider, J, 1992, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*. Temple University Press (=2003, 進藤雄三監訳『逸脱と医療化－悪から病いへ』ミネルヴァ書房)
- Elder-Vass, D, 2012, *The Reality of Social Construction*, Cambridge
- Hacking, I, 2000, *The Social Construction of What?* (=2006, 出口康夫・久米暁訳『何が社会的に構成されるのか』岩波書店)
- Jack, D. C.& Ali, A .2010, *Silencing the Self Across Cultures: Depression and Gender in the Social World*, Oxford University Press.
- 樫村愛子, 2004, 「現代社会における構築主義の困難－精神分析理論からの再構築可能性」『社会学評論』55(3):189-208
- 北田暁大, 2001, 「〈構築されざるもの〉の権利をめぐる」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房
- Laclau, E & Mouffe, C, 1985, *Hegemony and Socialist Strategy*, Winston Moore & Paul Cammack trans (=1992, 山崎カラル・石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治』大村書店)
- 中村正, 1987, 部落問題研究所編『現代京都の部落問題』部落問題研究所
- 1983, 「部落問題研究をめぐる最近の動向」『部落問題研究』76号:149-159
- 1993, 「戦後部落問題研究の方法」『部落問題研究』121号:82-112
- 2004, 「DV－加害者をどうするのかという問題が問いかけること－」『現代のエスプリ』第441号, 至文堂:43-51
- 2005, 「暴力加害にむきあう－ジェンダーと男性性の視点をとおして－」『精神療法』Vol.31, No.2, 金剛出版:184-186
- 2006 「動機づけられていないクライアントへのグループワーク－DV加害男性と共に」『精神看護』vol.9, no.3, 医学書院:55-59
- 2007, 「〈臨床〉から〈臨場〉へ－拓かれた臨床の視座と first person－野口祐二著『ナラティブの臨床社会学』(勁草書房, 2005年)をてがかりにして－」『現代の社会病理』第20号, 日本社会病理学会編:137-146
- 2012 「社会臨床の視界 (2) 『『あいだ』への関心－加害者臨床－』『対人援助学マガジン』 Vol.1 No.2 (通巻第2号):1-10
- 2013a, 「社会臨床の視界 (9) ケア・リーバー Care Leaver たち－『忘れられたオーストラリア人』への謝罪から考える－」『対人援助学マガジン』 Vol.3 No.1 (通巻第9号):14-25
- 2013b, 「社会臨床の視界 (10) ソーシャル・ナラティブと社会臨床－変わりにくい日常という物語を書き換えることの重要性和社会の物語構造に着目することの意義について－」『対人援助学マガジン』 Vol.3 No.2 (通巻第10号):15-26
- 2013c, 「社会臨床の視界 (11) 日常に潜む暴力」『対人援助学マガジン』 Vol.3. No.3 (通巻第11号):17-30
- 2014a, 「社会臨床の視界 (12) 暴力を振るうものたちの「言い訳」の分析－脱暴力への認知再構成の手がかりと修復の課題の生成にむけて－」『対人援助学マガジン』 Vol.3. No.4 (通巻第12号):16-27
- 2014b, 「臨床社会学の方法 (1) 暗黙理論」『対人援助学マガジン』 Vol.4 No.1 (通巻第13号):17-23
- 2014c, 「臨床社会学の方法 (2) ガスライティング」『対人援助学マガジン』 Vol.4 No.2 (通巻第14号):18-26

- 2014d, 「臨床社会学の方法 (3) 動機の語彙」
『対人援助学マガジン』Vol.4 No.3 (通巻第15号):
16-28
- 2015a, 「臨床社会学の方法 (6) 共軛関係-二
つのIP」『対人援助学マガジン』Vol.5 No.2 (通巻
第18号):20-31
- 2015b, 「臨床社会学の方法 (7) ポジショナリ
ティ-対人援助と民主主義」『対人援助学マガジ
ン』Vol.5 No.3 (通巻第19号):17-27
- 2015c, 「臨床社会学の方法 (10) サイレンシ
ング (沈黙化作用) -語られていないこと・語りえ
ないものがあることへの配慮-」『対人援助学マ
ガジン』Vol.6 No.2 (通巻第22号):20-29
- 2015d, 「臨床社会学の方法 (11) マトリックス
-その暴力や逸脱は偶然ではない-」『対人援助
学マガジン』Vol.6 No.3 (通巻第23号):19-28
- 中村正 / 石川洋明 / 野口祐二, 2004, 「座談会: 臨床社
会学の可能性」『家族とアディクション』日本嗜
癖行動学会, 第20巻4号
- 野口祐二, 2005, 『ナラティブの臨床社会学』勁草書房
- Rose, N, 2006, *The Politics of Life Itself*, Princeton
University Press. (=2014, 檜垣立哉監訳『生その
ものの政治-二十一世紀の生物医学, 権力, 主体
性』法政大学出版局)
- 1985, *The Psychological Complex: Psychology,
Politics and Society in England, 1869-1939*,
Routledge & Kegan Paul.
- 千田有紀, 2001, 「構築主義の系譜学」上野千鶴子編
『構築主義とは何か』勁草書房
- Spector, M, & Kitsuse, J. I., 1977, *Costructing Social
Problems*. Aldine de Gruyter. (=1990 村上直之・
中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築-
ラベリング理論をこえて』マルジュ社)
- ステイーブ・ウールガー, ドロシー・ポーラッチ,
2006, 「オントロジカル・ゲリマンダリング-社
会問題をめぐる説明の解剖学」平英美・中河伸俊
編『新版 構築主義の社会学-実在論争を超えて』
世界思想社
- 高橋哲哉, 2012, 『記憶のエチカ-戦争・哲学・アウ
シュビッツ』岩波書店
- 平英美・中河伸俊, 2006, 「構築主義アプローチの到
達点-エンピリカルな見地からの課題と展望」平
英美・中河伸俊編『新版 構築主義の社会学-実
在論争を超えて』世界思想社
- 竹村和子, 2001 「『資本主義社会はもはや異性愛主義
を必要としていない』のか」上野千鶴子編『構築
主義とは何か』勁草書房
- Towns, A., Adams, P., Gabey, N, 2003, Silencing talk
of men' s violence towards women, in *Discourse
and Silencing*, edited by Thiesmeyer, L.,
Benjamine Publishing Company
- White, M, *Re-Authoring Lives; Interview & Essays*,
Dulwich Centre Publications., 1995 (=2000, 小
森康永他訳『人生の再著述-マイケル, ナラティ
ブ・セラピーを語る』ヘルスワーク協会), 50-
254頁。

Sociological Examinations on Social Constructionism and Critical Realism
for Searching the Possibility to Develop the New Way
of Understanding the Social Problem :
About the Issues of Coercive Control Behavior on Aggression and Silencing

NAKAMURA Tadashiⁱ

Abstract : “Social Constructivism or Constructionism” is having an influence on scientific research in general. Especially, Sociology is also handling something “social” at the inside. Sociology has an affinity with these methods. But we have to recognize for arising some critics against the basic points of Social Constructivism or Constructionism. Going a step further through these critics, we will discuss the compatibility with narrative therapy that is aiming at re-organization of subjective reality by a language emphasized a making one’s life story. Narrative therapy is an attempt to re-construct one’s suffering issues through “clinical dialogue as an interactive cooperation”. After some considerations on critic and possibility of “Social Constructivism or Constructionism”, we would like to examine the potential of creating new direction on the study of social problems to combine this method with realist social theory that is called as “Critical Realism”.

Keywords : constructionism, social problems, narrative therapy, violence, silencing

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University